

# 東西南北

2026.1.8

JR別府駅前(別府市)  
で大仰に両手を広げる油屋熊八像は、心尽くしのもてなしで旅人をネンゴ口にした翁(1863~1935年)の意気が動

勢に表れている▼2007年、大分みらい信用金庫が創立80年記念で市に寄贈した。観光衰退で湯の街全体が鬱々とする中、玄関口で朗らかに旅行客を迎え続けた▼左足を上げている。「熊八さんは



吉像、コートを凜と翻す竹田市の軍神・広瀬武夫像、沈黙の奥に深い精神性が宿る同市の「オンリーワン」像……。辻畑作品はどれも静かな余韻がある▼日本初のバスガイド、村上アヤメさん(09年死去)は98歳で他界する1年前に言っていた。「別府駅の銅像は

好かん。私が知る熊八さんは、駅に降り立つ観光客にお尻を向けたりせん」▼別府は復活した。

奇想天外な発想を持つ一方、借財に苦しんだ。波瀾万丈だった彼に直立不動はありえない」。手がけた日出町の彫刻家、辻畑隆子さんは後に語っている▼きのう、彼女の計報(享年74)に触れた。端然と虚空を見つめる中津市の福沢論

その様を熊八は誰よりも待望したのであろう。再興を予見した白眉の造形作家は、いずれ活況に沸く泉都のヨロコビを銅像に委ねたのではないか。旅人を迎えるためでなく、あのポーズは市民の思いを背にした万感の方歳ではあるまいか。そう思えてならない。(康)